

「バンクシー」という現象  
— 壁に描かれたメッセージとマーケット —

津田 礼子

The “Banksy” Phenomenon  
— Message on the wall and Market —

Reiko Tsuda

今日、ストリートアーティストとして一世を風靡するほどの人気を博すバンクシー(Banksy, 生年月日未公表)の登場は、美術館以外にストリートが新しいアートシーンとしての存在感を増し、活況を呈する契機となり、現代アートの転換点となったという。ストリアートの活況におけるこのような効果は、「バンクシー効果」と呼ばれる。

ロンドンを拠点として路上の壁や、世界の紛争地の壁に絵を描き、その行為は違法と言われながらも、彼の作品は、今日の大衆社会と商業主義という背景の中で、投機の対象として高額で取引され、価格は高騰していく。政治的メッセージを制作のテーマとするバンクシーの意図とマーケットには、どのような関係があるのか。作家であるバンクシーの意図、及び大衆、壁に多くのグラフィティ(落書き)のある貧困地域の意識と、投機を目的とする投資家の意図には大きな乖離、矛盾がある。

グラフィティから出発し、グラフィティ発祥の貧困地域の層、移民の多い多文化地域の意識と緊密に関連すると思われるバンクシーのメッセージは、アートを投機の対象とする富裕層の意識とは対極にある。

下層階級からの視点、貧困や紛争という困難な状況への問題意識から活動するバンクシーにとっては、広く、多くの人々にメッセージを届ける路上の壁、国境を超えた紛争地の壁に、匿名で絵を描くことに意味がある。今日のマーケットの矛盾、ストリアートの壁に無断で描くという「違法性」という問題を残しつつも、バンクシーのアートを、以前の芸術の枠内にではなく、現代のアートシーンに現れた新しい一つのムーヴメントとして、「政治的・社会的メッセージ」を伝える「アクティヴィティ」として捉えることに意味がある。また、バンクシーの活動は、自らのインスタグラムから発信するなど、SNSによっても国境を越えて拡散し、現代のアートの在り方の一つの流れを形作っている。

本論考はバンクシーを取り巻く現象の中で、バンクシーが伝えたいメッセージの本質について考察したものである。戦争・紛争についての政治的メッセージと、グラフィティの発祥地であるニューヨークの貧困地域、バンクシーの出生地であるブリストルという場所の地理的・歴史的背景との関係、ストリアートへと移行する今日のアートシーンとマーケットとの関係から考察した。

戦争・紛争に関する作品としては、イラク戦争(2003～2011 年)、パレスチナとイスラエルの紛争(1948 年～現在)、シリア内戦(2011 年～現在)に関するものを取り上げた。